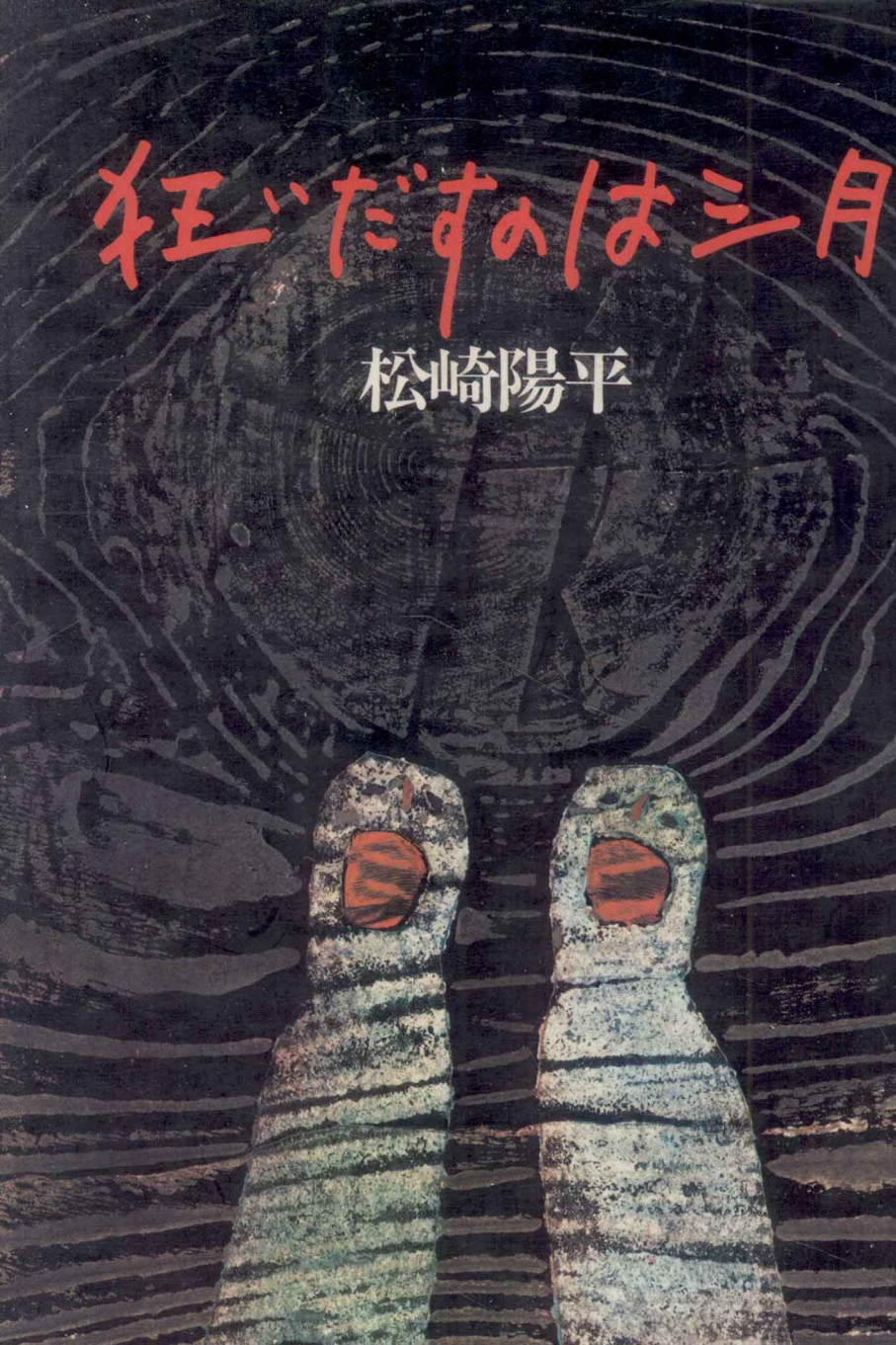
狂いだすのは三月

松崎陽平



すのはシ月

松崎陽平

河出書房新社

狂いだすのは三月　©1978

一九七八年一月二十日　初版発行
一九七八年三月三十日　再版発行

著　者――松崎陽平
装　幀――田沢　茂
発行者――佐藤晧三
発行所――株式会社河出書房新社
東京都新宿区住吉町九五
電話……営業三五五―五三一一
編集三五五―五三二一
振替……東京〇―一〇八〇二

印刷――東洋印刷株式会社
製本――小高製本工業株式会社
定価は帯・カバーにあります

狂いだすのは三月

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

新大阪で寝台特急に乗りかえた。蒸し暑いプラットホームは乗客や見送りの人だかりでごったがえし、それをよけながら自分が乗りこむ車両にたどりつくと、なにか大仕事を終えたような気分になった。列車の中、ホーム側はすでに寝台がしつらえられ、反対側の通路に立ってまずは一服。広い窓ガラスを通してみえる大阪のビル群、重苦しい空、しのびこむ夕闇。やっと機能を回復したおれの耳が車内にとじこめられた言葉をつかまえる。

——ここやらせんけ。じゃっど、ここでよかっじゃが——ささやかな老夫婦の会話。これは鹿児島弁。

——うんにゃ、明日(あす)ん朝はですな、うちん人の駅に迎えにでとんなはってですけん。もう心配なかとですたい——息子の嫁とみえる若い女にこたえているのは熊本弁のおばあちゃん。

これは熊本、さらに鹿児島へと向かう列車。自分が郷里への旅にとりかかっていることをは

じめて意識した。おっかしな旅だよ。きのう、みどりの窓口で切符を手に入れたんだし、今日は、その切符の指示どおりに新幹線に乗ってここまでやってきた。もっとも、大阪までは通い慣れてるわけだから、ボケッとしていても来てしまうってことなのだろう。その先、どこへ行くつもりでいたんだ？

「こんどはどちらです」

「関西。学校には一週間の休暇届をだしてある」

「こんな時期に大丈夫なの」

「心配することはないよ」

出発前の妻との会話。あまり多くを語らないことで、なんとなく関西の予備校の例の仕事といったぐあいの説明をしたつもりであるが、定期試験も近いこの時期、かの女が納得したわけではないのはもちろんのこと。しかたがないんだ、おれだってこれから先がどうなるのかわからない。とにかく事の進行をどうしても断ち切りたいんだよ。

「松崎くん、しばらく姿を消してなさいよ。あとはぼくに任せておけばいい。そうだなあ、一週間。理由は……法事とかなんとかもっともらしく考えて」

教頭との密やかな会話。数学あがりの教頭はいくらかおれの肩をもっている数少ない同僚の一人。その他大勢の教師たちだって、陰口をたたくことはあっても、どうってことはないん

だ。おれだって組合員のはしくれ、組合のあの形式的ないたわり合いのおこぼれぐらいにはありつけるだろう。

寝台に横になりカーテンを引きめぐらすとそれはそれなりに島宇宙。焦り、不安、そしてなげやり、そんな星団たちが旋回する。とにかく、こんなわけのわからない旅行ははじめてだ。放っておくと、ひどく落ちぶれた気持に襲われそうだ。

東京にでてなん年たったのだろう。二十五年、いや二十六年、戦後のどさくさの中で大学をでて数学の教師になって。そう、泣く子も黙る数学の先生。予備校、受験参考書、稼いだなあ。

——数学のできない奴は人間じゃないよ。数学ってのは完璧な抽象の世界なんだ。頭脳のゲームさ。わかるかい。頭のいい奴のお遊びでもあるってわけ。人間はこれだけの文化をもった。頭がよくって当然だろう。おい、そこのメトロンの坊や、ゆうべは遅くまでなにしてた、そう、若いからやることも多いわけだ。だけどなあ、人間ってのはそればっかりじゃだめなんだ。考えるアシなんて誰かさんも言ったそうじゃないか。君なんかいつもまん中のアシだけが勝手に考えちゃってんじゃないのか。ま、ま、みんなそんなに笑うんじゃないよ。もっとも君らの笑い方にはな、リアリティーが滲みでてるがね。さてと、この関数の特徴はと……おい君だ、そう、三列目のロングヘアー、そう君。うん、うん、$\sin\theta$ の二次関数だね。で、どう処理する。そうそう、なかなかやるもんだねえ。諸君、わかったかい。$\sin\theta=x$ とまるめると、

単純なxの二次関数だ。中学以来まいどおなじみ、グラフだって目に浮ぶってもんだ。ただし、一味ちがうのが受験問題。その一味とは、おい君だ。そうそう、θちゃんがどんなにがんばっても$-1 \leqq \sin\theta \leqq 1$ってことは、$x$に$-1 \leqq x \leqq 1$って定義域あり、だね。ここがつかめりゃ慶応の経済はこっちのもの——予備校での私立文系クラスの数学Ⅰの授業風景。ユーモアだ。アイロニーもなかなか。いつの間にか数学が好きになっていました。合格者たちからの葉書の文面。この予備校では、こうした葉書を一冊にまとめて次の年の宣伝に使う。おれの授業はここの目玉商品の一つだった。

本業の高校の場合は少し話し方がちがう。数学のスの字もうけつけないような数学嫌いがなん人かいる。そのことを頭に置いて授業しなければならない。

——おれはね、数学ができなきゃ人間じゃないなんて思っちゃいない。人間さまは偉大なんだ。やることは山ほどある。だから分業でやらなきゃならない。なにかができりゃいいんだ。なにか自分にむいてることをみつけてがむしゃらにやる。その結果ってのは、社会のしくみとやらがうまいこと纏めてくれるってわけ。数学ができなくったってほかに取柄があればそれでいいのさ。だからさ、本田、おまえが眠そうな顔をしてるからって、おれ怒ったことないよな。うん、いいんだよいいんだよ、どうぞどうぞ、グッナイ、お休み——これでみんながどっと笑いどよめく。数学がわからなくったって、これじゃおちおち眠ってなんかいられない。

ヒロシちゃん、どうしたの、オシッコ。トイレわかるわね。だいじょうぶだよ。しっかりつかまってするのよ。なまなましい母と子の話し声がぎくんと胸に突きささる。ここは寝台車の中。破られたおれの島宇宙。小学校六年の息子のふくれっ面、四年の娘の騒がしさ、そんなものが浮かんで消えた。おかあさん、ぼくおなかへっちゃった、トイレから帰ってきたヒロシちゃんなる男の子の声。なにいってるんです、もうみんな寝てらっしゃるのよ、すぐ朝になるわよ、ちゃんと毛布をかけて、母親の声。あとはゴーッ。再び島宇宙の中のおれ。

高校でのおれの授業は、軽妙なることをモットーにしていて、自分ではなかなか巧いもんだと思っている。それでも生徒の中にはおれを目の敵だと考えてる奴もいるだろう。試験の問題は難しいほうだし、したがってできが悪いぞと烙印を押される生徒も多くなる。生徒の時間割の中に占める数学の比重の大きさは、そうだなあ、かれらの一週間は34時間、そのうち数学が6時間だから、$\frac{1}{6}$強。いいかげんうんざりするのもいるだろうさ。女生徒の一人とこんな話をしたのも最近のことだ。

「なぜ数学なんか勉強しなくちゃいけないんですか」

「つまらんこと考えるんじゃない。そんなこと言いはじめたら、英語だって古典だって同じことだろうが」

その生徒は文科系の教科はよくできる。

「でも、いちばんエネルギーを必要としながら、最も役に立ちそうにない勉強が数学って感じなんです。もし数学がなければ、ずいぶんいろんな事ができそう」

「こわいなあ。いろんな事されないために数学があるのかも知れんぞ。ま、冗談はともかく、役に立つか立たんかはあとになってみないとわからんよ。大人がさんざん考えて、今の君らにはこんな頭脳のトレイニングが必要だと結論をだしたんだ。それほどまちがってはいないと思うがね」

「なんか、ひと握りの数学的才能の持ち主を拾いあげるためにわたしたちもお付き合いさせられているみたいで」

うーん、なるほどねえ。相手がまじめな努力家だけに、おれもそう思うなんてことは言えなかったけど。たしかにそんな面もあるよ。

二十年間も数学の教師をやってきたおれの内側のエネルギーはなんだ。数学がおもしろいってこともある。しかしそれは、毎年の各大学の入試直後、出版社から続々持ちこまれてくる入試問題を解説するときぐらいのこと、学校の授業レベルの内容じゃ、おもしろいもへったくれもない。数学を教えるのが楽しいというのでもない。しいていえば、数学を材料にして、親泣かせの世代たちをいなすのが楽しいということか。しかし、それほどサディスティックな趣味はないんだ。教師をはじめたのは生活のため、そうだなあ、今だって金を稼ぐのはおもしろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

い。高校のほうはともかく、予備校ってのは、あれでなかなか味な所なんだ。予備校ではおなじ数学の講師にも格付けがあって、まずはキャリア、それに人気度、つまりどのくらい受講生が集まり、飽きずについてくるか、なんてことが、俸給査定の要素になる。おれはキャリア・人気度ともに抜群で、ギャラは最高。なんとも痛快なシステムじゃないか。おれの書いた受験参考書も売れている。

日本で教師やるなら数学に限る。数学の教師やるのなら東京がいちばんいい。小学校から中学・高校、東京の親たちはもう受験、受験でまるっきり夢中だし、さらに数学の出来・不出来が合否の鍵を握っている現実を痛いほどご存知なのだ。集合だベクトルだ行列だと、教科内容の改訂のたびに苦労して勉強しなおし、なおかつまわりの教師におずおずと尋ねまわっているような頭の悪い教師だって、生徒さんや父兄の前にでれば、生き馬の目を抜く数学の先生なのだ。

同僚の中には、おれのことを受験屋だ、テクニックだけだと中傷している奴もいる。直接面と向かって言ってくるわけじゃないから、とくに反論したことはないが、その答だけはいつも用意してきた。現実をどう考えるんですか、A先生。あいつらにそんな高邁な思想が要るんでしょうか。ちょっと目を離すと因数分解さえできなくなり、三角法の公式を無理に暗記して消化不良をおこしてしまうかれらにですよ、B先生。

信じられないなあ。おれがこんな踏ん切りの悪い旅をすることになるなんて。あの事件は、そんなはたが騒ぐほどのことじゃなかったと思う。あんな形で、かねてから仲の悪かった小林に見られたのでなかったら、まあまあ堅いことは言いっこなし、で済んでしまったんじゃないか。国語科の教師たちは、かねてからおれを嫌がっていた。小林なんてのは鬼の首でもとったようにはしゃぎまわったんじゃないのか。いくらか調子よすぎたおれのちょっとしたつまずき。落し穴。大したことじゃないよ。倬士が傷ついただろうって？　なにあいつはケロッとしてるよ。

倬士か。あいつをかまい過ぎたのは確かだ。しょせん他人の子供、忘れちゃえばいい。一週間もして、また会うことになっても、ああきみか、その後どうだいですむだろう。

誰にも九州へ行くとは言わなかった。本業のほうには、なんとなく〝法事〟になってるし、妻には〝仕事〟とだけしか言ってない。予備校はもっとドライだ。休む、の一言だけですんでしまう。しいていえば、妻だけはなにかを感じとっていただろうが、地方の予備校での授業だとか、参考書の編集とか、とかく家を留守にすることの多いおれが一週間家をあけたからといって特別に心配することもないだろう。途中からでも連絡すればいいのではないか。ただ、なにかすっきりしないんだなあ。心ならずもとか、意志に反して、とかそんな具合なんだ。おれは人一倍、割り切りの早い人間なのに。

列車の揺れがおれの眠りをなん度か浅くして、最後にゆすり起こした。いや、多くの乗客が下車するところを見ると、そのざわめきで目を覚したのかも知れない。熊本だった。外はすでに白み渡り、どんよりと垂れさがった雲はちぎれながら北へ流れ、ところどころで青空がのぞいていた。同じ梅雨空でも、東京や大阪で見てきたそれとはずいぶん違う。動きが激しい。寝台を抜けでて通路に立つ。閉じこめられた人いきれ。息がつまる。急に狭い列車の中がいやになった。

そうだ、次の停車駅で降りよう。はやく九州の空気にお目にかかりたいもんじゃないか。

見渡すかぎりの濃いグリーンは藺草田。この季節の八代平野は藺草日本一の看板どおり。列車はそのグリーンを引き裂きながら八代駅に入った。ホームに降り立つと、まだ七時前なのにムッとする蒸し暑さ。九州だというので、すがしさに思いを馳せていたおれの期待過剰がおかしい。列車の中は冷房が効いていたんだよ。なんだか急に疲労感がおし寄せてきたようだ。

八代駅の待合室。ここの駅弁はなんだってこんなにまずいんだ。米がまずいんだなあ。米粒に艶やかさやしまりがなくて、子供の頃の芋めしを思い出したほどだ。八代平野は昔が米どころ、今は藺草。この駅弁のまずさはそんなこととも関係があるのかな。日本の文化うんぬんな

ど と論じるのはおれの柄じゃない。しかし、米がまずくなることだけは耐えられないよ。たまたま今朝のめしの炊け具合が悪かっただけだと弁当業者は言うかも知れないが、この一食でおれが八代に悪しき印象をいだくに至ったことだけは確かなのだ。

人吉へ向かう各駅停車のディーゼルの中には、通学の高校生が多い。変な話だ。八代市街に住んでいるかれらが、わざわざ農村部の高校へ通うなんて。教育委員会にでも問い合わせれば、高校進学率の急上昇に供給が間に合わないとかなんとか、それなりに理屈もあるのだろう。球磨川が見え隠れする車窓、いくつかの駅を過ぎたら、高校生たちはみんないなくなっていた。どうせ同じ高校へ向かって、同じ駅でどっと降りていったのだろうに、景色に気を取られていたおれが気も付かなかったぐらい静かな連中。

かれらの高校にも数学の教師がいるだろう。いったいこんな山の中で、どんな数学を教えているというのだ。おっと、それは言い過ぎというものだ。数学なればこそどんな山奥でだってやれるってこともある。鉛筆とわら半紙、道具も設備も不要。その意味ではこれほど公平な教科はほかにないともいえる。数学だけで入試をやれば真の機会均等、なるほどねえ。そんな目論見があるからこそ入試と数学の腐れ縁が温存されているのかもしれない。道具化した数学。それで稼ぎまくっているおれ。なんだかわびしい。

おれのことはやめよう、山ん中の数学の教師の話だよ。ひょっとしたら、腰に手ぬぐいなん

かぶらさげて、熊本弁まるだしの名物先生だったり、けっこう楽しくやってるのかもしれないじゃないか。

ところが、人生なんてこんなもんだと思っているかれのところに、偉くなった教え子が久し振りに訪ねてきて、かれはなんだか僻みっぽくなる。いやだいやだ、やっぱりつまんない話だよ。

ふっと偉士の顔が脳裏をかすめた。あいつの数学だけは天下一品だ。おれの高校時代のできを超えている。あいつ、ちゃんと学校に行ってるかなあ。おまえがもってきたこの間の問題、二人でヒーヒーいいながら考えたっけ。ああいうのは楽しいじゃないか。おまえにはあんな世界がある。あの世界だけでなぜ満足できないんだ。欲ばりめ。

窓ガラスの外で雨が強くなった。ぽつんぽつんと散らばった乗客、ゴトン・ガー、ゴトン・ガーといったテンポの各駅停車。うたた寝。学校の廊下を歩きまわる生徒たちのざわめきかと思ったら、乗客たちが降車口へ向かうそれだった。終点の人吉駅。なぜ、おれは人吉などにやって来たのだろう。出てみるか。

身軽さをいいことに中心街を歩きまわる。活気のない町。どこの店に入っても愛想がよくないと思う。とくに女性たちの表情が堅いなあ。もっともこっちだってうさん臭くみえているのかも知れない。冴えない顔しているだろうし、妙にインテリぶった理屈っぽさは隠せないのだ

から、場違いな、怪しげな客ととられもするだろう。しかしなあ、女が楽しそうにできないのは男たちが生きてないからじゃないだろうか。暗い梅雨空の下の、不満に縛りつけられた女のイメージ。

表向きはレストラン、その実は大衆食堂、そんな店で昼食にする。鮎の塩焼は期待はずれ、多分養殖ものなんだろう。身にしまりがなくて生臭い。土木工事の現場で働いているのだと思われる男たちの傍若無人な騒ぎようが、負け犬の遠吠えに似てむなしい。かれらのたち去ったあとの空虚さ。奥の隅に、昼間っからほろ酔いかげんの男がいる。スプリング仕掛けのように、リズミカルに頭を前後運動させながら、年増のウェイトレスに自分の身の上を話して聞かせているところだ。弱々しい熊本弁。気まじめに繰り返されるその声が、気の滅入りがちなおれの神経を逆なでする。苛立たしさが体中に広がり、今にもヤメロと怒鳴りそうになりながら、なおかつ聞き耳をたてているおれも正気ではないよ。

おれに言わせれば、馬鹿まじめってのはおまえさんのことなんだよ。まじめ過ぎてだめになっちまうんだ。いい年してなにやってんだ。若いものを何人か使ってるんだって？　かりに本当だとすりゃ、その若い連中だってよっぽどのでくの棒だろうさ。親方がまっ昼間からこのていたらくじゃね。信じちゃいないよ、その連中だって。なんか持ち逃げできるものはないかって、今ごろうろうろ探しまわってるかも知れないぜ。ウェイトレスのおあねえさんだって暇で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.